

「自分の頭で考え、表現すること」 先生方の教えが心に火をつけた

県立広島大学で

経営情報学科准教授として活躍している

佐々木宣介さんは、幼い頃に憧れた

研究者への道を着実に歩んできました。

ただ、今の自分があるのは、

これまでに出会った多くの人たちの

導きがあったからだといいます。

いったい、ということなのでしょう？



佐々木宣介さん (平5・石電子)

県立広島大学経営情報学部
経営情報学科准教授

ささき のぶすけ●1971(昭和46)年生まれ。宮城県仙台市出身。石巻専修大学理工学部電子材料工学科卒業。東北大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了後、静岡大学非常勤研究員、広島県立大学経営学部経営情報学科助手、県立広島大学(名称変更)経営学部経営情報学科講師を経て現職。

研究者だった祖父に 深い憧れを抱く

あらためて、これまでの半生を振り返ってみると、本当に人に恵まれているなと思います。さまざまな人との出会いが、次につながる何か、成長するためのきっかけを与えてくれました。

その最初といえるのが、父方の祖父でした。小さな町工場を営んでいた祖父は、戦前、磁気録音の研究に携わった研究者の一人だったのです。磁気録音は、後にソニーが発売したカセットテープの記録方法として使われているもので、祖父らは、その原型といえる研究を行い、成果もあげていました。

また、家には、社団法人発明協会が主催している恩賜発明賞のトロフィー

も。この賞は、自動織機を発明した豊田佐吉や、御木本真珠店の創業者で、真珠の養殖方法を発明した御木本幸吉なども受賞している賞です。祖父は、1965年に『変圧器又は類似装置ほか』という技術で受賞しています。小さかった私には、受賞した技術がどのようなのか理解することはできませんでしたが、とても大きな賞をいただいている祖父を誇らしく感じたものです。同時に、技術者への深い憧れも抱くよう



幼少時にはよく祖父に遊んでもらった

になりました。

この頃の原体験と、元々理系が得意だったということもあったのだと思います。大学進学を考えるようになると、技術者としての道が開ける理系学部を自然と意識するようになっていました。

学ぶこと、考えることの 楽しさを知った大学時代

次なる出会いは、石巻専修大学時代に訪れます。なぜ、石巻専修大学を選んだのかといえば、1期生になれるから。地元仙台周辺を中心に進学先を考えていたとき、父が「石巻に今度開学する大学があるようで、そこには東北大学を退官された先生方が何人か来るみたいだ」と教えてくれたのです。東北大学の教授陣というのも魅力的ではありましたが、やはり私の気を引いたのは、「1期生」という響きでした。その言葉からは、何かのびのびとした学生生活を送れるような、楽し気なイメージを連想できたのです。

入学後、実感した印象もイメージに近いものだったと思います。先生方も学生たちにとっても丁寧な指導をくださいました。後に学長を務めた坂田隆先生も、そのような先生のお一人です。高校までは、知識の習得をすることが勉強の中心であったと言えるでしょう。しかし、坂田先生は、「自分の頭で考え、表現することが大切だ」と授業を通じて繰り返し教えてくださいました。学生独自の考え方を求めるということは、その考えを聞き、フィードバックする分、手間も時間もかかります。しかし、



石巻専修大学時代に所属した新聞部の仲間たち

坂田先生は、その時間を惜しむことなく、学生に接してくださいました。

大学3年次、初めて研究らしい活動に参加したときのことも印象深く残っています。友人に誘われて自然界にもともと存在する自然放射線を測定して論文にまとめることにしたのですが、そのとき指導してくださったのが、基礎理学科の佐々木芳朗先生です。通常の授業でもない課外授業なのに、先生はお忙しい中、熱心に付き合ってくださいました。

私は、理論と測定データを比較するコンピュータシミュレーション計算を担当。坂田先生の教えどおり、必死に考えることで、自分なりの答えに到達したと当時は思っていました。しかし、学生を指導する立場となった今振り返ってみれば、佐々木先生は、どのような結果が出るか、あらかじめ予測できていたはず。それでも私たちのやる気をそがないよう、結論を示すようなことはせず、要所要所で適切な助言をするにとどめながら、私たちを導いてくれたのだと思います。

私は理工学部電子材料工学科で、卒業研究の指導を担当していただいた中込真二先生を始めとして、学科の先生方には本当にお世話になりました。しかし、生物学などほかにも興味を持っていた分野もあり、そこは学生の気軽さ、他学科の先生方の研究室もよく訪

ねていました。教え子ではありませんから、迷惑だったかもしれないのに、先生方は嫌な顔をすることもなく、貴重な時間を割いて、さまざまなことを教えてくださいました。

多くの先生が学生の興味を引き出し、秘めた能力を伸ばしていこうと、学生たちと正面から向き合ってくれている——石巻専修大学は、そんな大学だったと記憶しています。

人に教えることの 難しさを痛感

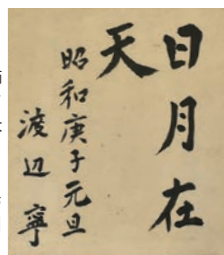
現在は、県立広島大学経営情報学部経営情報学科准教授として、学生を指導する立場にいます。この道を選んだ理由は、子供の頃に抱いた研究者への淡い憧れや、大学時代に実感した探求することの面白さがあったからです。その気持ちは今も変わってはいません。現在取り組んでいる研究テーマのひとつである「中将棋」などの古い将棋のルールに関する研究では、今後も引き続き研究成果を出していきたいと思っています。

ただ、教壇に立ち、学生たちに講義をしていると、説明すること、解説することが嫌いではない自分に気づくことができました。学生がとてつもなく成長する瞬間に立ち会えたときは、内から湧き上がってくる喜びを実感できます。気持ちが入っていないような授



中将棋の研究は、まだ道半ば

「日月在天」。祖父が恩師より贈られて大切にしていた色紙の言葉。佐々木さんは、「恵まれないことがあっても、お日様やお月様はみえてくれる」と理解している



業態度をしていた学生が、突然興味を示すようになり、質問してくる内容の質もどんどん上がっていく。そんな場面に遭遇すると、人を教える奥深さや楽しさを感じることができるのです。そして、アメリカの教育者、ウィリアム・アーサー・ワードの言葉とともに、教えることの難しさを痛感します。

凡庸な教師はしゃべる。

良い教師は説明する。

優れた教師は示す。

偉大な教師は心に火をつける。

私は残念ながら偉大な教師の域には達していないでしょう。ときに経験する、学生の急激な成長も、そのきっかけとなる何かを私自身がコントロールしたわけではなく、学生が自らきっかけとなる何かを見出したに過ぎません。しかし、石巻専修大学で出会った先生方は違いました。なぜなら、そこで学んだ4年の間に、確かに、私の心に火がついたからです。大学という将来進む道を見つける大切な時期に、そのような多くの出会いを経験できたことは、私にとって忘れることのできない財産になっています。(談)

中将棋とは

鎌倉時代や室町時代から楽しまれてきた将棋の一種で、縦横12マスずつに区切られた将棋盤で戦います。現代の将棋よりも駒の種類が豊富で、「獅子」や「麒麟」「鳳凰」「猛豹」「仲人」「奔王」など現代将棋にはない駒も多数存在します。その動き方も独特で、相手の駒を飛び越えて移動できたり、1マス前身してから横に動けるなど1度に2回動ける駒があったりするのは、

ルールも地方や時代によって変化しているため、佐々木さんはAI技術を活用したシミュレーションを駆使して、ゲームの面白さとルールとの関係性について研究しています。現代将棋に置き換えて簡単に説明するなら、飛車角落ちや取った駒を再利用で

きないといったルールを設定したときのゲーム時間の変化や指せる手の数=戦略性の変化によって、面白さがどう変わるのかを調べているわけです。

佐々木さんは、この中将棋の研究者としてテレビ取材を受けたこともあります。



中将棋には、見たこともない駒がいくつも存在する